様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２４４４

研究課題名（和文）近世軍書における本文の形成・展開と文芸化についての研究

研究課題名（英文）Study on the formation and development of texts and literaryization in jpanese early modern military books

研究代表者
湯浅　佳子（YUASA, Yshiko）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：００２８２７８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の近世期、中でも17世紀前期に成立した軍書・軍記について、本文の生成・展開と文芸化の様相について考察した。特に後世の歴史や文芸に多大な影響を与えた織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に関する軍書作品類を扱った。（1）未整理状態にある関ケ原合戦関連軍書の諸本調査を行い、『内府公軍記』『関ケ原始末記』『慶長軍記』を中心に、作品の系統付けと分類を行い、影響関係を研究した。（2）織田信長・豊臣秀吉のイメージ形成を考察するため、『川角太閤記』と太田牛一・小瀬甫庵『信長記』・小瀬甫庵『太閤記』との関連を考察し、『川角太閤記』が特に小瀬甫庵『信長記』『太閤記』を意識して創作されたことを述べた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現在において歴史的事実として認識されている戦国時代の合戦譚がいかにして成立・展開していったかを、史実の文芸化という視点から考察するものである。すでに歴史学の方面では、谷口央や藤本正行、白峰旬らにより、織田信長・豊臣秀吉の合戦や関ケ原合戦の虚構と真実を史料から読み解く研究が行われている。また堀新や金子拓らにより、織豊軍記・関ケ原合戦軍記類を史実としていかに位置づけるかといった研究が進められている。本研究では、これまで未整理であった戦国軍記（近世軍書）の諸本の書誌調査と本文研究から、それらの夥しい諸本・作品群を分類して系統化を行い、歴史の虚構化が作品間で継承・展開される様相を考察した。

研究成果の概要（英文）：Regarding military writings that were established in the early modern period, we considered aspects of the generation and development of text and literaryization. In particular, he dealt with military documents concerning Nobunaga Oda, Hideyoshi Toyotomi, and Ieyasu Tokugawa, which had a great influence on the history and literature of posterity. (1) We researched unarranged military books related to Sekigahara battle, systematized and categorized the works mainly on "Kaifu Kogunki", "Sekigahara Shisekiki" and "Keichogunki", and studied the influence relations. (2) In order to consider the image formation of Nobunaga Oda and Hideyoshi Toyotomi, the relationship between "Kawakaku Taikoki" and "Nobunaga" and "Taikoki" was examined, and "Kawakaku Taikoki" was written by Kose Hoan, "Nobunagaki". It was said that it was created in consideration of.

研究分野：日本近世文学

キーワード：戦国軍記・軍書　近世文芸　歴史　仮名草子　出版と写本　関ヶ原合戦　聞書・覚書　兵学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

日本近世文芸の小説・草子や演劇における重要な一要素に、元和偃武以前の合戦譚や武辺話がある。仮名草子・浮世草子・読本・講談本といった小説・草子類には、歴史や合戦を描いた所謂「歴史もの・合戦もの」と称すべき作品群がある。それらがどのような歴史的資料に基づいて成されたのか、どのような創作意図があったのかについては、これまでに様々な研究が備わる。

近世前期の仮名草子・浮世草子の「歴史もの・合戦もの」作品と歴史的資料との関わりについては、桑田忠親や阿部一彦、笹川祥生らによる研究が備わる。また近年、戦国軍記（近世軍書）研究のための必携である和泉書院『戦国軍記事典　群雄割拠篇』『戦国軍記事典　天下統一篇』が刊行され、軍記・歴史資料がいかに文芸化されたかを探るための基礎的情報が整備された。

筆者はこれまで近世前期小説（仮名草子）における所謂「歴史もの・合戦もの」の作品がどのような先行資料に基づき、どのような背景と意図により成されたのかを考察してきた。鎌倉から室町時代までの北条氏･後北条氏を中心とする関東の合戦を対象とし､仮名草子が先行の合戦記、歴史書や聞書・覚書の類を情報源に編集されていること、殊に『鎌倉北条九代記』『鎌倉管領九代記』が徳川幕府の管理下にある歴史書を拠り所にしていることを明らかにした。また「歴史もの・合戦もの」草子の素材となった近世軍書（戦国軍記）の諸本調査として、後北条氏の合戦記『北条記』の諸本の系統付けを行った。

２．研究の目的

本研究では、近世期に成立・流布した歴史的逸話・合戦譚の生成と展開の様相を探り、その文芸性を明らかにするため、近世軍書（戦国軍記）を研究対象とした。近世軍書とは、慶長・元和頃から享保期頃にかけて主に成立した戦国期の合戦・動乱の記録で、聞書・覚書の体裁のものから長編実録的なものまで様々な作品がある。それらは、近世小説・草子・演劇だけではく、近代以降の講談や司馬遼太郎をはじめとする歴史小説、テレビ娯楽番組等にも大きな影響を及ぼしている。現代にも継承される戦国期の歴史伝承の形成を担った近世軍書について、その成立背景と伝承のあり方を探るのが本研究の目的である。

３．研究の方法

近世軍書には、戦国期のあらゆる動乱を記した作品があり、各作品に多くの写本が伝存する。そこで、作品と作品との関係、そして諸本と諸本との関係ついて、本文の生成と展開のあり方を考察するという作業を行い、それによって歴史が虚構化・文芸化されていく様相を捉えていくことにした。そのために、以下の方法を用いた。

①『戦国軍記事典』を参考に、近世軍書をリスト化し、分類・系統化する。
　作品と作品との内容比較により、影響関係を考える。
②個々の作品について、諸本調査・書誌調査を行い、諸本を分類・系統化する。
　諸本間の本文比較により、本文の生成過程を考察する。
　また、同一作品の写本と板本との本文比較により、出版事情を考察する。
③本文考察から、近世軍書が参考にした史料・記録を明らかにし、
　近世軍書の成立背景・意図を考える。
④本文考察から近世軍書と周辺の小説・草子との関係を明らかにする。
　また近世軍書の本文から絵画類への影響を考察する。

具体的には、関ケ原合戦の顛末を記した植木悦の長編軍書『慶長軍記』、酒井忠勝・林羅山の聞書『関ケ原始末記』、太田牛一『内府公軍記』、聞書『秀吉没後物語』（仮題）、本能寺の変から関ケ原合戦までを記した聞書的軍書『川角太閤記』について考察した。

４．研究成果

本研究での成果は以下とおり。

(1) 関ケ原合戦に関する軍書の研究（『慶長軍記』『関ケ原始末記』『秀吉没後物語』）

①口頭発表「『内府公軍記』『関ケ原始末記』関連書の諸本研究」（第 175 回仮名草子研究会、2017 年 7 月 14 日）
・未整理の関ヶ原合戦軍書類を『内府公軍記』『関ヶ原始末記』を中心として分類・系統化した作業の結果報告。

②口頭発表「関ケ原軍記の諸本研究―太田牛一『内府公軍記』から植木悦『慶長軍記』まで―」（第 181 回仮名草子研究会、2018 年 7 月 6 日）
・関ヶ原合戦軍書の嚆矢、太田牛一『内府公軍記』から長編軍書の植木悦『慶長軍記』に至るまでの関連軍書を一覧化し、諸本を分類・系統化した作業の結果報告。

③口頭発表「関ケ原合戦軍記の生成と展開―『関ケ原始末記』の叙述方法―」（国際学術大会：檀国大学・東京学芸大学古典文学分野主催、2018 年 9 月 7 日）
・関ヶ原合戦軍書の始発、『関ヶ原始末記』と『内府公軍記』等の先行軍書との関係、本文の生成と叙述の特徴を明らかにした。

④単行書『関ヶ原合戦を読む』（井上泰至・湯浅佳子編著、勉誠出版、2019 年 1 月）
・関ヶ原合戦の顛末を記した第一次的集大成の書『慶長軍記』（寛文八年成、植木悦）について、寛文三年本・八年本の全本文の翻刻を掲載。解説では本書の典拠について指摘した。

⑤口頭発表「関ケ原合戦軍記本文の生成―牛一・林家から『慶長軍記』へ―」（東京大学史料編纂所国際研究集会「合戦のイメージ形成から実像を考える」2019 年 1 月 26 日）
・植木悦『慶長軍記』が太田牛一『内府公軍記』、『関ヶ原始末記』、岡山大本『慶長記』等の軍書に取材し関ヶ原合戦の記録として集大成させたことを述べた。

⑥論文「『関ヶ原始末記』とその周辺」（『かがみ』第 49 号、大東急記念文庫、2019 年 3 月）
・『慶長軍記』にも影響を与えた関ヶ原合戦記の原点『関ヶ原始末記』が、幕府の修史編纂事業の営みと関わり成立したことを明らかにした。

⑦翻刻「【翻刻】茨城大学図書館菅文庫蔵『秀吉没後物語』（仮題）」（『戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究』堀新ほか 12 名、2019 年 3 月 31 日）
・『関ヶ原始末記』との関係を有する聞書『秀吉没後物語』を翻刻、解題を付した。

(2) 豊臣秀吉をめぐる合戦記の研究（『川角太閤記』）

①口頭発表「『川角太閤記』の基礎的研究―聞書としての性格―」（国文学研究資料館共同研究「軍記および関連作品の歴史資料としての活用のための基礎的・学際的研究」2020 年 2 月 22 日）
・豊臣秀吉の一代記・軍記『川角太閤記』の聞書・覚書・軍書としての性格、成立時期・成立背景、作者像について考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 湯浅佳子	４．巻 49
２．論文標題 『関ケ原始末記』とその周辺	５．発行年 2019年
３．雑誌名 「かがみ」	６．最初と最後の頁 38-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 湯浅佳子	４．巻 1
２．論文標題 翻刻『秀吉没後物語』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 戦国軍記・合戦図屏風古文書・古記録をめぐる学際的研究	６．最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 湯浅佳子
２．発表標題 関ケ原合戦軍記の生成と展開-『関ケ原始末記』の叙述方法
３．学会等名 檀国大学・東京学芸大学国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 湯浅佳子
２．発表標題 関ケ原合戦軍記本文の生成-牛一・林家から『慶長軍記』へ-
３．学会等名 東京大学史料編纂所国際研究集会「合戦のイメージ形成から実像を考える」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 湯浅佳子
２．発表標題 関ケ原軍記の諸本研究-『内府公軍記』から植木悦『慶長軍記』まで-
３．学会等名 第181回仮名草子研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 湯浅佳子
２．発表標題 『内府公軍記』『関ケ原始末記』関連書の諸本研究
３．学会等名 第175回仮名草子研究会（日本近世文学会の分科会例会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 井上泰至・湯浅佳子	４．発行年 2019年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 545
３．書名 関ヶ原合戦を読む　慶長軍記翻刻・解説	

１．著者名 湯浅佳子・大久保順子・柳沢昌紀	４．発行年 2019年
２．出版社 東京堂出版	５．総ページ数 330
３．書名 仮名草子集成　第６０巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考